

潮音寺だより

第 241 号
平成 15 年 11 月
電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp

<ホームページ> <http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11



『般若心経』【無住】

小島午郎 画

決めつけては
いけません

眞実は

必ずしも

一つだけとは
限らないのです

とらわれては
いけません

眞実は

時として
殻を破ることから
生まれます

こだわりますぎては
いけません

ひとり勝手な

眞実への思い込みは
滑稽かつ

はた迷惑なことが
多いものです

眞実と思われるものとして
その実体はないのです

ミリンダ王の問い

私ども、朝ご飯を炊きますと、先ず、仏様・ご先祖様に仏飯をお供えます。また、頂戴物をした時などにも、自分たちが口にする前に、仏壇へお供えします。常口頃より、仏壇の仏様・ご先祖様には花を供え、灯明をあげ、香を焚き、「供養すること」は、当然のこととして、これまで、疑問に思うことはあまりなかったのではないのでしょうか。

しかし、とかく合理的に考える今日、食べてもらえない供え物をして仏様に供養することは、意味がないのではないかと考える人が多くなっていることも確かです。ただ、このような疑問をいただくのは、現代人に限つてのことではなかったのであります。

釈尊が入滅されてから一・二百年

ほどたった、紀元前一世紀後半ころに、西北インド(現アフガニスタン・パキスタン・中央インドに及び)を支配していたギリシア人の王に、ミリンダ(メナンドロス)といふ人がいました。

そのミリンダ王は、権力・富力・知力のすべてを兼ね備え、論議を好み、少しでも骨のありそうな人がいると聞けばどこまでも行つて論戦を挑んだといひます。しかし、王にかなう者はなく、その都度、「ああ、全インドは空っぽである。実に、全インドはもみ殻のようなものである」と嘆いたといひます。ところが、仏教の論師ナーガセーナ長者(那先比丘)と出会い、問答を重ね、ついに王が仏教に帰依して出家し、阿羅漢(修行僧の最高位)に達したといふ経緯が、

『彌蘭王問經』あるいは『那先比丘經』といふ名で収められています。

ギリシアはヘレニズム文化を生み出した西洋思想の源泉であり、インドは、仏教を生み出した東洋思想の源流であります。その二つがぶつかり合った問答のその内容は、時代にそぐわないものもあるにはありますが、現代の我々の疑問にも、明快に答えてくれるものであります。冒頭に掲げました、供養に関しては、以下の「とくであります」。

.....

「尊者(ナーガセーナ)よ、もし仏陀が供養を受けるならば、仏陀は寂滅したとはいえない。仏陀はなおどこかに生きていて、世間と結びついていなければならぬ。もし、まったく寂滅したといふな

らば、かかるものを尊崇し供養するとは、無意味でなければならぬ。尊者よ、この西刀論を、わがために、みごと解きたまえ。」

「大王よ。世尊は寂滅しもうた。もはや、なんの供養も受納いたしません。だが、大王よ。炎々たるたる火が燃えつきて消えてしまった時、この世には火はなくなったのでしょうか。」

「いいえ、尊者よ、そんなことはありません。また火を必要とする者はだれでも、自分の力で、再び火をおこし、それでもって火の必要な仕事をなすことができます。」

「大王よ、だから私は、仏陀はすでに寂滅し、供養を受納しないはずだから、かかる者に対してなされる供養は、空虚で、無益であるといつのは、間違っているを申さね

ばなりません。大王よ、かの炎々たる煙の「いへ、いへ、いへ」といふ時、十方の世界を照らしたもうた。今や仏陀は、その煙の燃えつきて消えるがごとく、十方世界を照らし終わって、まったく寂滅したもうた。もはや、仏陀は、この世のなんの供養も受納いたしません。だが、火が消え去っても、人々は、また火を必要として、自分の力で、再び火をおこさねばなりません。それと同じように、たとえ仏陀はまったく寂滅いたしましても、人々はまたその教えを仰ぎ、その実践の後をしたって、すぐれた人間の状態に達することを得るので

す。このとき、仏陀に対してさげられる尊敬と供養は、たとい仏陀がそれを受けなくとも、けっして空虚でもなく、また、無益でもない

のであります。」(他事例略)

「いまや、この難しい西刀論は、尊者(ナーガセーナ)によって、裁断せられた。」

……

この他の一例として、「念仏によつて、大罪人も救われるという一方では、たった一度の罪でも地獄に墮ちるといふ矛盾しないか」という問いに対しては、「石は、小石であっても水に沈むが、百の車に積むほどの石くずでも、船に載せれば浮かぶことができる。念仏は船のようなものだ」と、ナーガセーナ長老は、ミリンダ王に答えています。

信仰というものは、領解なくして生まれません。秋の夜長、ミリンダ王と、ナーガセーナ長老の問答に、耳を傾けてみませんか？



いんざんせい

仏教の宇宙観に須弥山世界があります。世界の中心に須弥山とい

う山があり、その山の水面から八万由旬（一由旬が約七キロメートル）の高さがあります。その周辺に九つの大山、八つの海と四大陸が取り巻いており、

この四つの大陸が人間の住むところで、南の大陸は閻浮提といひ、仏が出現した島とされます。

この四大陸のはるかかなたに鉄田山という山なみが大海をまぐるく囲んで支えており、須弥山世界とは、上下に田筒形のような長いものによって受けとめらるる。閻浮提の下には八大地獄などが配置され、鉄田山を支える下層には、

金輪・水輪・風輪があり全体を支えています。

金輪と水輪との境目が「金輪際」と呼ばれるところ



住職通信

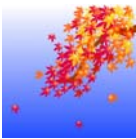
仏心には敵はない

とで、大地を支える基盤となる金輪の最下底を意味します。そこから物事の極限をさす言葉となり、「金輪際しません」とか「金輪際行くまい」など、最後の境界線をあらわす意味に使われるようになったのです。

ひろさちや 『仏教歴史百科』

雑記

扉絵



檀家の小島午郎様から、新築庫裏にと、御自筆の素晴らしい

油絵を頂戴しました。ここに本誌扉絵として紹介させていただきます。すと共に、感謝申し上げます。

▼本山秋の寺宝展

・11月1日(土)～11月30日(日)

午前8時30分～午後5時

夜の特別拝観(ライトアップ)は、

・11月8日(土)～11月30日(日)

午後5時30分～午後9時30分

もみじの名刹永観堂の寺宝が、多数展観されます。

▼二十周年

昭和58年12月に創刊いたしました本誌が、今月号をもちまして、ちょうど二十年になります。途中休刊することもなく、ここまで何とか続けてこられましたのは、偏に皆様のお陰、感謝申し上げます。

▼秋の夜薄切り檸檬に

ダーズリン 沐魚